



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第一六一号）

処暑 しよ じよ

八月二三日

新宮

御白石持行事で、新しい御正殿ごしょうでんを拝見しました。

内宮の神域に着いたのが夕方六時で、うっすらと明かりが残る中の御白石の奉献でしたが、御正殿の大きなこと、厳かさ、そして清らかさに感じ入りました。内宮、外宮の中でも、御正殿はとくに「唯一ゆいいつ神明造しんめいづくろ」と呼ばれますが、「唯一」の重みが伝わってきました。

前回は、「立ち止まらないように」と警備の方が促していましたが、今回はそういったこともなく、ゆっくりと見せていただきました。御正殿の両側に立つ太い棟持柱むねもちばしらは屋根を支える柱ですが、上の方が5センチほど空いているのもよくわかります。これは歳月とともにヒノキが収縮するため、あらかじめ空けておくのですが、真新しいだけにしっかりとその空気がわかります。二十年を経ると隙間がなくなり、棟木と棟持柱がぴたりと接することになります。

また、御正殿のまわりの回廊を飾る五色の据玉すえだまも美しい光を放っています。

また、装飾の少ない中で、色の着いたものは目をひきます。これまで七宝焼で製作されていましたが、今回は色漆いろつむを使って仕上げています。

私は今回二回目の奉献でしたが、三回目の女性は年齢を重ねるとともに感動が深くなると思います。

「孫にもわかるように、今度はここに新しいのが建って、次の二十年後はあっちに建つ」と言い含ませていると、なんとというか、じわっときましたね」

また、東京から来た友人たちは、家族で寄せ合って御白石を納めたと話してくれました。

御白石の奉献は、家族のつながりもまた深くしていたのでした。

文

千種清美

